

# モラロジーの神について

望月幸義

## 目次

- 一、序
- 二、広池博士の神に対する科学的態度
- 三、モラロジーにおける神の認め方
- 四、神と人間の関係
- 五、神と最高道徳の諸原理
- 六、モラロジーの神に対する信仰
- 七、絶対神と現神
- 八、神の心

## 一、序

最近、私は神に対する研究を試みている。一つには、一般の学者の見解をまとめてみた。もう一つには、モラロジーにおける神に対する考え方を調べてみた。本稿は後者についてのものである。

## 二、広池博士の神に対する科学的態度

広池博士は青年時代から真摯な敬神家であり、道徳の実行者であつたから、神に対する礼拝や誓いなど一般的なことは行なつてきたが、科学的精神の強い博士は神を真に認めることができなかつたようである。明治三十七年「はじめて宗教を修めんとす」として、明治三十八年には一夏禪を行なうが、「どうしても自分の心のうちに、神とか仏とかを認めることができなかつた」と述懐している。おそらく、広池博士も初めは神の存在を否定してゐたのではないだろうか。そして明治四十二年頃、科学的見神に到達する。この明治四十二年頃は広池博士が最高道徳を実行し始めた年でもあつた。最高道徳の発見は日本皇室の万世一系の研究（歴代天皇が道徳的に偉大であること、孔子及び孔子の高弟の万世一系の事実）、教派神道十三派（天理教、黒住教、金光教、みそぎ教、その他合計十三派の神道）の研究などの結果、道徳の重要性、運命の自覚、心の世界の発見、宗教上の奇跡に対する科学的証明の可能性、諸宗教に一貫する原理の発見、神の科学的証明などを骨子とするものであつた。

明治四十二年から『道徳科学の論文』が出来あがるまでの約二十年間、最高道徳の実行をし、その確信の上になつて『論文』は書かれてゐる。明治四十二年頃の広池博士の「科学的見神」と論文の神に関する記述には大きな相異があるのかないのか、それは簡単な問題ではない。（この問題については本稿では論じない）いずれにせよ、『道徳科学の論文』における記述はかなり徹底して科学的立場に立つて記述されているといえる。

どのような点にそのことが窺えるかといへば、次のような記述においてである。まず科学的には、神の存在を証明することができないと述べてゐる。

「神の存在は人間の靈魂もしくは精神作用の存在が具体的に証明せられざるように、やはり科学的に証明することが出来ぬのであります」（『道徳科学の論文』⑦八八頁、以下『道徳科学の論文』の場合、書名は省略する）。

次に神の性質、内容については人間の知識では分からないと述べてゐる点である。例えば「かくのごとく人間の知識を超越せる神の本質を人知によつて定めんとすることは全く不可能の事業であります」（⑦二四七）、「右のごとく宗教にて説くところは絶対の神に関することなれば、人間の小知をもつてこれを推測することは出来ませぬ、且つ今日尋常人の知識をもつては、直ちにかかることを承認することは出来ぬのであります」（⑦二二八—九）、「宇宙的正義は絶対的なる神の心に基づくものでありますから、人間的正義から推しただけでは、その実質が確定され得るものであるとは思われませぬ」（⑦六九、七三）。「哲学及び宗教においては本体の現れたのが現象であるということになっておりますが、科学においてその関係を証明することは出来ませぬ」（⑦一七一）。

ちなみに神を見たことがあるという人に対しては、広池博士はそれは病人の錯覚か投機師の虚言であるとしてゐる。「本体は何人が見たかというに、昔から心身健全にして、且つ知識ある人にしてこれを見た人はないのであります。たまたま神を見たという人もありますが、それは病人の錯覚か、もしくは投機師の虚言であると識者から許せられてゐます。しからばに、私もは何故にその本体の存在してゐること信じ得るようになったのであるか、それは諸聖人の実行を見てここに至つたのであります」（⑦三三二）

次に、神の存在や内容についての記述において、「合理的」といふ言葉を使用していることである。

「さればわれわれ人間は直接に神に接したることはなけれど、神の存在と性質とを合理的に知ることを得るのであります」（①序五、②二一九）、「歴史の示すところ及びわれわれの理性の判断の範囲内における現神」（⑦二一九）といふ言葉からは、カントの「純粹理性の範囲内における宗教」といふ言葉が思い出されるだろう。このような科学的な態度の決定版ともいふべきものは、「モラロジー」では、「その神の作用かと信ぜらるるところの宇宙自然の秩

序ある運行から推して、かかる絶対神の宇宙の内もしくは外に存在するものと公理的に仮定するのがあります」(⑦二二二)と述べられていることである。公理とは一般に、そのことの正しきは証明できないところの基本的前提であり、そのことを認めないと学問が成立しないので、基本的前提として認めるものである。モラロジーないし最高道德も神の存在を認めないと学問の体系が成り立たないので、神の存在は科学的には証明できないが、基本的前提として神の存在を認めるという意味を含んでいると考えられる。

### 三、モラロジーにおける神の認め方

モラロジーによる神の認め方は四つに分けて考えることができるだろう。

- (一) 自然の法則(因果律)の存在から
- (二) 人類の歴史から
- (三) 聖人の事跡及び教訓から
- (四) 公理的に仮定すること

#### (一) 自然の法則の存在から

このことを示す文章は一つには、先に引用した「宇宙自然の秩序ある運行から推して」(⑦二二二)であり、もう一つは「しこうしてこの自然及び人為の法則をもって宇宙的精神の作用と見なすことは、学問上あえて差し支えないことでありましょう。しかれば、人間は直接に本体(神)を認むることを得ざるも、その本体の作用を認めて、その因果律の的確偉大な勢力を崇拜して、これを神と思惟することは、不合理な思想もしくは観念ではありませんまい」(⑦二二三)である。

#### (二) 人類の歴史から

このことは、人類の歴史と、すべての民族、人間が神の存在を認めているという事実があることである。未開民族や、古代社会においては、多くの民族は神のようなものの存在を認めていた。それらの民族の神観念は多神教から一神教にいたるさまざまなものである。また、それぞれの民族においても、神観念は時代に応じていろいろ変化しているのが実状だろう。このようにすべての民族に神観念が存在するのは、人間の知識では解明できない多くのことが存在したということ、しかもそのことが、人間を苦しめたこと、人間の力に比べて圧倒的に大きな力をもっていったことなどが考えられる。地震や台風などが、何か力のあるものの力であると考えるのは十分推測できる。次に、こうした莫大な力をもったものが、権力者や主権者に利用されたことも容易に考えられる。すなわち、権力者が、自分の権威を誇示するために、絶対的なものと結びついたということである。

宗教の中に神がとり入れられたことについては、人間の無力と絶対的なものへの依存ということが考えられる。科学の発達しなかつた時代においては人間の不幸の最大の原因は病気であつただろう。こうした場合、救われる道は絶対的なものへの帰依以外にはなかつたのではないだろうか。そして個人の精神的、身体的救済を行なうものの中で、とくに大きな力を発揮したものについては、神的なものとしてあがめられていったのだろう。

広池博士が、人間と動物を区別する最大の理由は、神を認めるか否かにあるとしても合わせて考えてよいだろう。つまり「しかし全体的に見れば、人間のほうが動物より道徳的に優れているはずでありまして、その優れた唯一の点は人間が神的なるものを認めておることにあるといい得るのであります。そこで歴史的及び心理学的立場からも、この生きたる人間は自然に神を認めてこれを信ずるといつの科学的原理が存在しておるといふことが出来ます」(⑦二二四)

更に人類学的に考察してみると、いやしくも「人」という名前のつくものは、どのような未開人でも、神を信じ、礼拝をしているのに対し、人間以外の動物は神を信仰することを知らない。そこで歴史的及び心理学的立場からも、生きている人間は自然に神を認めて、これを信ずるといつの科学的原理が存在しているといふことができる。

### (3) 聖人の事跡及び教訓から

広池博士はこの証明の仕方を最も強調しているといえる。この点の記述が一番多いことからそう考えられる。いくつか挙げておこう。「現神ありて宇宙根本唯一の神すなわち本体の觀念を生ず」(⑦二三三)、「更に換言すれば、聖人の実行が人心に感激を与えたる結果、一般人間においてはかかる慈悲且つ至誠の人のいうことであるから、もとより嘘でなくして、真にこの宇宙には唯一の神が実在してわれわれを創造し、且つ守護しておるものである故に、この聖人の教えに従えばなすなわち神の心に適うものなりとの信念を起すに至ったのであります」(⑦二三三)、「されば、聖人の精神すなわちその高き品性が本体(神)の存在を証明し且つ人間の五官にて認め得ざる現象の中より神を顕現して、もつて世界人心救済の基礎を人類に開示したのであります。なおこれを要約す

れば、神(本体)及びその勢力の作用は終始この宇宙間に存在するも、その存在を人間に開示してこれを首肯させたのは諸聖人の徳にあるといふことであるのです」(⑦三三四)、「然りしこうして、今回の最高道徳は正統科学の原理に基づき、世界諸聖人の事跡及び大小諸宗教を開ける宗祖及び派祖の古跡を帰納して、その偉大なる品性に一貫せる神の存在の信念をもつて宇宙の最高真理として認めたのであります」(⑦三三五)、「諸聖人は……人間の眼に見えぬ神の存在と神の法則とを自分の至誠且つ慈悲の力によりて人間に信ぜしめ、もつて今日の文化を創造且つ進化せしむるに至ったのであります」(⑧二七九)。

神の性質についても、聖人自身の精神及び行動によって証明されるという。

この他の証明として、私が考えるのは、人間本性が神を求めていると考えられる点である。これは、広池博士が神を求めることに「人間の深い欲求」(⑦二二四)としていることにも関連している。

神は歴史的にみても、現代の世界の人々の状況を見ても人類と深い結びつきをもっている。現代は、神々に対する信仰が揺らいできていくといわれるが、それでも圧倒的多数の人々は神を信じて生きている。これは、神を認めることが私たち人間の本性の欲求と合致しているからであるといふこともできる。すべての人は理想を求めつねに向上しようとしている。同時に、人格の統一を求めている。理想や向上を求める行為は、向上の最高段階として神を立てることになるし、人格の究極的統一も結局神によって可能になるといえるだろう。また、我々が神を求めるのは、人間の有限性とも深いかわりを持っている。我々は自分の知性や行動能力に限界を感じ、迷い、悩み、苦しむことが多いが、そのようなとき、自分の世界には我々以上の存在があることを信じ、これにさまざまな願望や期待をよせる。つまり、人間は苦境や危機におちいったとき、神の力を信じ求めるのである。ここに我々有限な人間が、無限なものにふれる道も開けてくるのである。さらに、神を認めることは、我々の人格

を根本的に改造する原動力になる。

パスカルは次のように述べている。「確かに、神を知ることなくして幸福はない、また神に近づくにおうじて幸福になる。また窮極の幸福は神を確実に知ることである。また神から遠ざかるにおうじて不幸にもなる」(『パンセ』一九四の二)。

また、スイスの教育者ペスタロッチも次のように述べている。「神への信仰、それは人間の感情が、人間の本性上人間と最高の間柄に立つ者に対して示す階和の情であり、それは神の親ごころに対する人類の信頼にみちた子ごころである。神への信仰は人生の平安の源である。人生の平安は心の秩序の源である。心の秩序はわれわれの諸能力の迷うことなき活用の源である。われわれの諸能力の活用に秩序が立っているということは、諸能力の発達とその知恵へまでの教育の源である。そして知恵はいっさいの人間のしあわせの源である。神への信仰、それはすべての知恵と恵福の源であり、人類の純粹な教育に至る自然の道である。神への信仰、それは人類の本質に刻みこまれている。善悪の別の感情のように、また正義と不義とをかぎ分ける消すことのできない感情と同じように、それは人間教育の基底としてわれわれの本性の内奥に、不動の確かさをもって伏在しているのである」(『隠者の夕暮』「政治と教育」、明治図書所収、二六ページ)。

我々人間は向上心を持ち、常に進化と発達を求めて止まないもの(⑦六八)であるとすれば、その進化と発達の行き着く先には、最も完全なものが存在しなければならぬ。それを神と考えれば、向上心を失わない限り、神を求めているといえるのではないだろうか。アウグスティヌスは精神上の苦悶の末、遂に神を見出し、そこで「私たちの心はあなた(神)の中に憩うまでは安らぎを得ることはない」(『告白録』)と述懐している。神を求めることが人間の本性と不可分に結びついていると思える。又、マザーテレサは「いかなる人の心もその奥

深くに神の知識があります。すべての人々の心の奥底には神と通じあいたい望みがあります」と述べている。

なお、広池博士の次の文章は、科学性、合理性を基本としながらも、人間としての弱さも合わせ認めざるを得なかった博士の心情、又、そのことを文章にして残した博士の素直な心情が読みとれる。「さて前に一言するところの宗教的体験においては、いかなる意思堅固の人といえども、疾病もしくは大困難の場合に、自己の精神もしくは自己の過去における道徳的行為よりほか、信頼するものなしとせば、すこぶる寂寞を感じざるを得ないといのであります。これ多くの識者もまた認むるところであります。ことに私は幾多の大患と幾多の困難とに遭遇して、多年生死の間を彷徨して今日に至りましたが、かかる場合、一面には、自己の精神及び自己の過去における道徳行為の結果に信頼すると同時に、他面、神の生ける人格に信頼して、もって安心を得、かくて今日あるを致しておるのであります。」(⑦二三八―九)。

神の存在は科学的に証明できないとした広池博士は、結局、神の存在(実在)を信ずる(確信する)という言葉を使用せざるを得なかった。例えば、「神(本体)の存在を信ずること」、「神に対する信仰」、「最高道徳において神を信ずるということは神の法則を信ずることでありませう」(⑦二四三)などと述べられている。

博士は、科学的立場と、神の存在を信ずることを合わせて、「最高道徳は科学に立脚して自発的に神を信じ、聖人の教えに従い」(⑧二八四)と述べている。このような神に対する博士の態度を「科学的」と捉えるか、「宗教的」と捉えるかは、読者の「世界観」、「価値観」の問題となるだろう。

又、博士が、このような立場に立ったのは、科学の研究が不十分であったからだろうか。そのように理解できる文章もいくつかある。たとえば、「いま、モラロジーは科学であり、且つそれにて説く最高道徳実行の方法もまた科学の原理を基礎としておるのであります。しかし斯く科学的原理に基づいておるといふ理由をもって、諸聖

人の教説及び一般人の経験を無視しないのであります。何となれば、科学は今日すこぶるよく発達しておれど、なおいまだこの複雑極まりなき自然界及び人間界のすべてを遺漏なく究め尽くしてはいないからであります。故に科学の原理のみにて一切を説明することは不可能であります。されば、最高道徳においては、ひとり科学の原理のみでなく、その他諸聖人の教説及び一般人の経験をもこれを探り、もって最高道徳実行の基礎となすのであります(⑦二四八)

#### 四、神と人間の関係

合理的に神を仮定したモラロジーでは、神と人間の関係を次のように考えている。神は宇宙自然の主宰者であり、神の心は自然の法則である。

まず、神は絶対の力をもっており、人間の力はごく限られたものである。人間は神によって生かされている存在である。このことは次の引用に詳しく示されている。「人間は神の創造である」(①序二二二)、「聖人の教説及び実行によれば、私どもの生命・財産及び自由は神の所有であります」(⑦一四二)、「人間の持っている自由意思も神から与えられている」(①一五三、⑥二二四)、「人間の行動は自己がこれをなすにあらずして自然の法則(すなわち宗教的にいえば神の力)に支配せらるるものなりとの觀念をもって最高道徳の実行的原理となす」(⑦一七一)、「すべて自分の行動は自分の力で左右し得るものでなく、自然の力すなわち神の力によるのである」という精神作用になりましたならば」(⑨二九二)、「われわれ人間は自然界の力(神)によりて自然界に生まれ出て、自然の力(神の心)によりて養育されつつあるので、自分の力は微弱なれば、ただ自然の法則(神の心)……」(⑧二二二)、「私ども人間は、……この宇宙の自然界に発生したる現象の一つであって、この自然界の支配を受けて生

存、発達もしくは変化を遂ぐるのであります。且つ私ども人間は、他の無機物もしくは有機物と異なり、自由意志を有して、外界の勢力に適應することを得れど、それもある程度までにして、絶対的のものでなく、ついに自然の勢力に対しては、ほとんど無力のごとくに屈伏せねばならぬのであります」(⑦一七〇)。

次に、人間は神の心である自然の法則(最高道徳)に従うことによつて進化し、自然の法則に適應する生活をすることによつて進化するとされる。つまり、人間の使命、あるいは人間としての人間は神の意志(心)に従つて生きることである。

つまり、すべて神を中心として生活するのである。神の心に従い、実行の結果も神に任せ、自分の苦勞の結果は神に捧げるのである。「いま最高道徳は、すべて神の慈悲心に立脚して、その成否及びその成功の時期をすべて神の心すなわち自然に任せておく心理状態でありますから」(⑨三三三)、「労をも資をも神に捧げて施恩を思わず」(⑨二七〇)、これは「天を楽しむ者」とされる。「最高道徳の実行的原理は天を畏れ且つ天を楽しむ精神及び行動によつて表現せらる」(⑦一八〇)、「神様より健康・長命・開運且つ万世不朽の家運を授けらるるといふことを確信して楽しんで生活するのであります」(①七八)、「自分の一切の行動は神の力で出来るものとして」(⑧二二二)三、人間は神の力を頼る、神の力に信頼することが大切なこととなる。人心の開発救済を行なう場合でも、結局は、神の力によつて、開発救済が成就すると考えるのである。例えば、「神ながらの道」などという語もあります。すなわち何事も神の心及び神の力にて出来るので、自己はただその道具に使われるだけのものであるという思想であるのです」(⑦一七二)、「およそわれわれ人間が他の人間を救済するということは、われわれ人間の力にて出来ることなくして、神の力であるという信念をもって、真の無我境において努力する場合にはじめて他の人間が救済されるのであります」(④四〇二)、「そこで人心の救済ということは、学力・知力・金力もしくは権

力等のごとき人間の力のみでは出来ぬので、全く神の力を借りるほかないと信じております」(⑧二六四)。  
自分の身にふりかかる不幸や困難さをも、神が自分に与えて下さった「恩寵的試練」として受け止めるように教えている。「神様が自分にかかる体験を与えて下さったものであるので、実に感謝のほかなき次第である」(⑨一〇三)。

このような生き方をする人間が幸福な人生、立派な生涯を築いているとされる。「結局、天地の法則すなわち神様の心からいえば、一般民衆の安心・平和及び幸福実現を助くる人間でなければ、この世の中に必要はないのであるのですから」(⑧一九二)。「人間はその精神及び行為が自然の法則すなわち神の心に適合せざれば、真に永久の生存権および発達権を獲得することは出来ぬと同時に」(⑦二二三)、「しかしながら、結局、いかなるものも天すなわち神の力には勝たぬとのことであります。故に神の心に従って行動するものが最後の勝者であるということです」(⑨四一七)。

次に人間は、神性、神の分霊あるいは仏性を持つとされていることも、人間と神の関係を考える上で重要である。「最初の人間の霊はみな同じ神の分霊で、その肉体はこの宇宙の一部分たる幾つかの原子の結合したもので」(⑦一五三)又、神は全霊であり、人間は分霊と考えられている。

「私も自身の肉体をはじめ森羅万象一切を挙げてこれを神の肉体の一部として尊敬するのであります」(⑦二四八)、「その相手方を神の一部分として尊敬するはもちろん、その物質をもまた神の一部分と見なすのであります」(⑦二五〇)、人間ばかりでなく、すべての事物を神の一部分として見るようにとも教えている。

「(一)をもつて、私どもは最高道徳において聖人の教説を採用し、まず宇宙の現象をもつて神の表現となし、私どもの心をもつて神の心の分霊となすのであります。且つその分霊の行為が本体の霊の法則と一致する場合には、

その分霊は幸福となり、然らざる場合に不幸となるものと見なすのであります。かくて人間の一切の精神作用及び行動の根本が神の恩恵であるということになり、いかなる事もすべてこれを神に向かって感謝することになるのであります。これがモラロジーの最高道徳における神に対する原則であります」(⑦二四八―九)、「万物みな仏性を有す」(⑥二〇五、⑦六七)、「万物はみなわが身に備わっておるものであって、わが身はすなわち小宇宙である。それ故に、大宇宙の本性たる誠の心と恕の心をもつて世に立つならば、自然に大宇宙の本性に合することが出来て、ついに仁者すなわち聖人になり得るであろう」(⑥二五二)、「中国の倫理の根本思想においては、自然すなわち神の本質と人間の本性とは同一であって、人間が神の本質に従うのが天理であるとなっております」(⑦六六)、「更に農・工・商業に従事するものならば、その使用するところの器具及び生産品に対してもこれを単なる物質と見ずして、これを神の一部分と見なし、これが処理をなすに当たりてはつとめて敬虔の心を用うるのであります」(⑦二四九)、「最高道徳においては一切の事物を神聖なるものとして尊敬し且つ自己一切の精神生活及び行動を神の恩恵の結果としてこれを感謝す」(⑦二四六)、「且つ他人に対して契約もしくは取り引きをなすにも、その相手方を神の一部分として尊敬するはもちろん、その物質をもまた神の一部分と見なすのであります」(⑦二五〇)。

## 五、神と最高道徳の諸原理

人間と神の関係がこのようなものであれば、神が人間生活の中心となり、最高道徳の中心となることは当然である。そもそも神の心とは自然の法則であり、最高道徳である。この三者は根本的部分において同じ意味をもっているといえる。そしてその核心は慈悲にあるのである。例えば「宇宙自然の法則すなわち神の心たる慈悲」(⑦

七)、①序一二三、②二四一、③二八六、「最高道徳は神の意思の表現たる自然の法則である」(①序一〇九)とある。

従って、最高道徳の諸原理(五大原理)は神の心、自然の法則そのものである。一切の法則は根本的にみれば神の心より出てきたものとされる。これらの原理が神ないし神の心に由来するとされているのは当然である。最高道徳は神の心に従う生活のことである。「人間の精神生活の実質は神の心たる慈悲の心となりてすべての事に当たる」(③一九五)、「モラロジー及び最高道徳は人間をして神仏の本質に同化せしめて最高道徳を實行せしむるにあり」(①七六)というような表現がたくさん使用されている。「最高道徳は神的文化である」(⑥二二四)という言葉もある。

次に、最高道徳の各原理と神の関係を示す記述を見てみよう。まず自我没却については、「自我を没却して神の慈悲を体得すること」(①序一二六)、「自我の没却とは、自己の不完全なる先天的及び後天的原因に基づけるところの自己の精神を棄却して、神(本体)の本性すなわち自然の法則に適合するように改心することをいいます」(⑦一九二)、「自我すなわち在来固有の自己の精神を棄てて、神の心と入れ替うること」(⑨二九三)、「第一に、自己の精神を没却して、神に縋る心が生じてくるのであります」(⑧二五二)。

次に、義務先行の原理における罪の観念は、神に対する罪(シン)が中心となっている。又、神、仏、聖人などはみな義務先行の結果からできたものとされているのである。

伝統尊重の原理については、次のように述べられている。「最高道徳にて「伝統」と申しますのは、神(本体)及び聖人より直接にその精神を受け継ぎおとるところの一つの系列の総称であります」(⑦二六一、三二四、三八二)、「伝統というは神の代表者であり、ことに精神的伝統は全く神の精神を伝えておるはずのものであれば」(⑦

一九四)、「伝統尊重の原理は最高道徳の実質の核心を成すところの神の慈悲心の唯一の表現であるのです」(⑦二七一)、「人間がこの精神伝統の教えに従って行動するということが、天地自然の法則すなわち神意に従うことになるのです」(①序七)。

人心開発救済の原理についても次のように述べられている。「最高道徳の人心救済は、真にその名のごとく、人間の精神を神もしくは聖人の心に一致するように改心させることであつて」(⑧二〇〇)、「救済されたということ、は、われわれ人間がその固有の人間の知識及び人間的道徳から解脱して、神の心たる一視同仁の慈悲寛大の精神となり、いかなる事にも自己反省をなすの精神になるのであります」(⑧二二五)、「人間一切の事業中、人心の最高道徳の開発ほど神の心(宗教的には)すなわち自然の法則(学問的には)に適いたるものはありません」(①序一二二)。

更に、五大原理以外にも、モラロジーならびに最高道徳の實行においては至るところに神が侵透しているといえる。その代表的なものをいくつか挙げておこう。まず、純粹正統の学問は、神の心を淵源とするものである。「聖人の垂教せらるるところの「純粹正統の学問」は、右の神意に出ずるものにて、神の知徳を合わせ含むものであると教えられてあるのです」(①序六)、「モラロジーにていわゆる正統は、……神(本体)の心を継承せるところの世界諸聖人の教説・教訓及び実行上に一貫せるところの最高原理であるので、これまさに人類の生存・発達・安心及び幸福の原理であるのです」(⑧一八)。

同時に、教育については「モラロジー及び最高道徳における教育は神の知識(ウイズダム)と神の慈悲とを人心に扶植して最高の品性を造らしめ、もってこれに相当するところの人格を完成せしめんとするものである」(⑧一六四)。



次に政治についても、「政治はまず神意を体得してわが身を修むることより始まることを明らかにす」(⑧一六八)、「そこで聖人正統の教えにありては、すべて在上の人の務めとしては、神様に奉仕して神様の精神を守り、この精神を下の人の心に移植してこれを感化・教養し、もってその国民を善良にしてこれを統治するというのであったのです」(⑧一六六)。

また事業経営も神と深く関係している。「以上、歴史上の事実及び聖人の教訓によれば、いっさいの事業の成功は単に物質の力のみにとどまらず、人間至誠の精神作用のこれに加わる場合に、その力天地に感通して、いわゆる奇跡と称する人間予想外の好果を得ることあるを示されています」(⑥二四二)。

更に、医療、芸術、武器の製造なども、神の心に一致することを根本として示されている。一例を示しておこう。「中国及び日本における兵法・武術及び武器製造の根本精神は神の慈悲心より出でたるもの」(⑥二二八)。

## 六、モラロジーの神に対する信仰

人間と神の密接不可分の関係ならびに神の心は自然の法則であり、かつ同時に最高道德であるという立場から、神を信ずることは宗教団体の専有ではないということになる。人間生活あるいは人間の道德的生活は、神を信ずることなしには成り立たないのである。「そこで、神は必ずしも宗教団体の専有でなく、すべて政治・法律・道德及び宗教の源であるのです。故に、神を信じて聖人の教訓を守り、道德的生活をなすことはあえて宗教を俟たずして出来ることであります」(⑦二五六)。「モラロジーは聖人の教訓・教訓及び実行に一貫するところの学問・思想・道德及び信仰を科学的に組織せるものなれば、その性質上おのずから神のことを述ぶるは当然であります」

### (①序二二四)。

しかも、神に対する信仰は、モラロジーにおいては、宗教の場合と根本的に異なっている点に注意しなければならぬ。その要点は、宗教においては、神に依頼する信仰が中心であるのに対し、最高道德による信仰は、神の心を実行すること、すなわち最高道德の実行が信仰になるということである。そこで、最高道德的信仰においては、形式にこだわらないのである。「神に対する要求的信仰は普通道德に属し神の心を体得且つ実行する信仰は最高道德に属す」(⑦二四四)。「幸福は神に対する信仰のみにて得らるるものではないのです。しこうしてこれは神の心に一致する高尚なる道德心の発現及びこれに合致する道德上の若干条件の実行によりてはじめて得らるるのです」(①九〇)。「およそ神仏を礼拝しもしくはこれに祈禱する結果が開運となるのではなくして、神仏の大神を知ってその大恩に報ゆるためにその神仏の心に適うごとき精神作用をもって行動するところの最高道德実行の結果が開運となるのであります」(④三三五)。

最高道德において神を信ずるということは神の法則、すなわち自然の法則を信ずることである。物理学的因果律と人間の精神作用と行為の因果律を信じて、自我を没却し、神の慈悲心に同化して、伝統を尊び、人心の開発救済に尽くすことである。従来社会で行なわれているいわゆる信仰は神を礼拝あるいは祈禱することが中心になっている。即ち、神に対して幸福が与えられることを要求するのである。それ故に、従来の信仰は普通道德であり、これに対して、諸聖人の教えに従って、神の心を体得し、実行することは最高道德になるのである。

さて神を認め、信ずる態度には二つのものがある。一つは全く他力的であって、ただひたすら神を信じ礼拝するものであり、もう一つは、その根本においては他力的であるが、自力を排斥しないものである。すなわち、前者は信仰的生活であり、後者は信念に基づく道德的生活である。前者のような信仰的生活をするものは、ただひ

とえに神を信じ、一身を神に捧げて、人心救済に従事するか、自分が所属しているは教団のために全努力を提供するか、あるいは又、ただ神を礼拝し、神に依頼することを唯一の目的としている。このような生活をする人々の多くは、その思想、感情、態度が一般社会と合わず、そのために人類全般を救済する方法と目的において時代錯誤の要素を多分にもっている。神に対する信仰がややもすれば、一般人の承認を得ないのは、このような偏狭な信仰に由来しているからである。これに反して、真の信仰に基いて道徳的生活を行なうものは、単なる信仰を行なうのでもなければ、単に知的に道徳を実行するでもない。すなわち神を信じて、その信念の上から道徳を実行するのであって、必ずしも信仰を表面に現わさない。しかしながら内心深く神を信じて、その日常生活をすべて神の法則によって進むのである。

「自分の宅に神を祭る事が人心救済の入門なり。これをもちゅうちよするものには到底真の最高道徳者にはなり得ず、真の安心幸福は実現せず。特に神様をお祭りするということは重大なることにて、最高道徳の入門でありまして、これから健康、長命、開運、万世不朽の安心、平和、幸福が生まれ出るので、その安心、平和、幸福の根本方法であります」。

「そもそも傲慢の心強くして、聖人の実行を模倣することをせず、聖人の教うるところの絶対の神の前にわが精神を捧げてわが頭を下ぐることの出来ぬものが、いかでか神の慈悲心を実現することを得ましようや。かかる精神を有する人にて自身は神と同じき慈悲を有すと考うるは誤りであって、それはみな自己の自負心にはかならぬのであります。かくてその自負心に基いて行くところの慈善的行為はみな前第五項にいわゆる同情もしくは義侠心にして、何らの価値もなき低級の道徳心にすぎないものであります」(⑦二四〇—)。

「かくのごとく、何人にも自分を措いて専心他人の幸福のみを祈る心が出来て、はじめてその人は最高道徳に真に救済された人であります。しこうして他人の親となり、伝統の系列に入る資格が出来たのであります。この礼拝の精神がすなわちその人の日常生活の一切を支配する精神となりて、はじめてその人の健康も長命も開運も出来るのであります。全世界の人々この点につきて最も深き反省を要するのであります」(⑦二五四)。

「すなわち真の最高道徳の礼拝はまず神に感謝し、次に自己の精神及び行為の改造を誓い、次に国の伝統及び家の伝統の幸福を願い、次に世界の平和を願い、次に最高道徳の伝統及びその実行者の仲間の幸福を願い、万一、伝統の先輩もしくは最高道徳の実行者の仲間故障あるときには、その回復を願い、自己に故障あれば自己の精神及び行為の改善を誓い、且つ故障の有無にかかわらず、すべて人心の開発もしくは救済に対して更にいっそうの努力をいたしますと、心を心の底より誓うのであります。かくて自分のことはいっさい祈願せぬのであります。私のごときは年来、常に諸伝統の主体及び先輩に対し、自己の精神的子供に対し、且つ一般の人々に対して、その安全と幸福とを祈るほか、自分のことを祈ったことはありません。ただ自分としては慈悲の足らぬことを懺悔するのみであります」(⑦二五三—四)。

「神の實質は世界諸聖人の教説・教訓及びその実行上に一貫するところの事跡より推せばいわゆる慈悲であるので、その作用はいわゆる自然の法則であるのです。しこうしてこの自然の法則の中に、人間に関する心理的法則・生理的法則等をはじめとし、人間の間に存する社会的法則のごとき、ものがあります。されば神を信ずるといふことは神の定めたる法則すなわち道徳を実行することでありませぬ。しかるに従来知識浅薄のものは、神は一視同仁なるが故に何人をも同等に愛するものなりと誤解して神を信ぜぬのです。且つ社会の実際上の有様につきてこれを見るに、神を信ずるもの必ずしも幸福ならず、神を信ぜざるもの必ずしもみな滅亡することはないのであります。よって識者といえども神の信仰に対して疑いをはさむ挟むものが多いのであります」(⑦二三九)。

「古来、神の信仰は……人間の利己的本能をばそのままに心の中に有しながら、ただ形の上に神を信じて幸福を求むるにすぎないので、一利一害を免れませんでした。聖人正統の教えにては、まず自我を没却したる上に神の慈悲心を体得して、その慈悲心を実行するのでありますから、その信仰は真に生命を有するものであります」(①序三〇)、「自我を没却して、神の心に同化し、自然の法則に服従するという精神の確定が神に対する信仰となり」(⑦一九三)。

結論として、最高道徳による信仰は次の立場を基本とする。

「これに反して、真の信仰に基づきて道徳的生活をなすものは、単なる信仰をなすのでもなければ、単に知的に道徳を実行するのでもありません。すなわち神を信じて、その信念の上から道徳を実行するのであって、必ずしもその信仰を表面に現わさぬのであります。しかしながら、内心深く神を信じて、その日常生活をすべて神の法則に依拠して進むのであります。かくのごとき人々においてはその行うところの道徳が、たとい最高道徳的でないにせよ、かかる人々はこの人間社会において、事業に成功するとか、社会的地位を得るとか、その他自己の生活上に善い影響を受けておるのであります。かくのごときは歴史的及び社会的事実に徴して明白に知られておる事実であります」(⑦二四二)、「さて、古き信仰は非科学的且つ空想的であります。今回の新しき最高道徳の信仰は科学的且つ実際的であるのです」(⑦二四三)。

## 七、絶対神と現神

広池博士の神に対する考え方の特色は、神を宇宙根本唯一の神(絶対神)と現神の二種類に分けていることである。

「さて以上説明するところによりて、宇宙根本唯一の神と現神との区別は大略明白となったと考えますれど、なお両者の区別につき一言説明を要することがあると思ひます。すなわち宇宙根本唯一の神はこの宇宙の実質及び内容を形造るものにして、宇宙一切の事を支配し、且つ人類をはじめ森羅万象の生命をその内部より直接に支配し、その生死・健康・疾病及びあらゆる運命の保存・発達・変化の原動力となつておるのであります。しかるに現神はその徳高くして、宇宙根本唯一の神と同じく、われわれ人類を慈愛し、われわれ人類の生存・発達及び幸福を増進せんことを念として、われわれ人類のために無我の努力をなしてこの世を去られ、もつてわれわれ人類をしてその精神的及び物質的生活の法則を知らしめ、且つわれわれ人類が今日かくのごとく幸福を享受し得るとき施設及び経営をなしてこれを遺されたのであります。これによりて、われわれ人類ははじめて神の存在と神の法則とを知り、且つ現実における幸福を享受し得るのであります」(⑦二三〇)。

「この本体と現神との区別を要約していへば、その実、われわれ人間は本体の一部分でありますから、本体はわれわれ人間の肉体の細胞内に宿りて直接にわれわれの生命を守護するものと考へて真理に反することはないのであります。次に現神はわれわれ人間の肉体の外部よりわれわれの生命及び幸福を守護するものであるのです」(⑦二三一)。

聖人はその心が真に慈悲かつ至誠であつてその行動はすべて慈悲の表現であるから、私たちからみれば、聖人は全く神聖であつて、神のような人である。それ故にこの聖人は、昔から神が再現したものと呼ばれ、あるいは又、神とも神の子とも呼ばれているのである。すなわち、聖人の崇高、かつ偉大な品性の力は、人々の信仰をひき起こして、神の存在を人間に悟らせたのである。換言すれば、聖人の実行が人心に感激を与えた結果、人々はこのような慈悲かつ至誠の人の言うことであるから、嘘である筈がなく、真にこの宇宙には唯一の神が実在して

我々を創造し、守護しているものであるから、この聖人の教えに従えば、神の心に適うものであるという信念を起すようになったのである。

「それ故に、われわれ人間は現神が人間のために苦心し且つ苦勞せられたるところの事跡を回想し、感激し、且つその人格に憧憬して、その教訓を体得し、更にこの本体の絶大なる威力に信頼し、その偉大なる慈悲心に同化し、且つ抱擁せられ、もって最高道徳を實行し、ついに安心立命の域に達すべき順序となるのであります。故にわれわれ人間の生命の保存と幸福の増進とは本体と現神との二つの神の力によるものであって、その一を欠けばわれわれの幸福は全からぬのであります」(⑦三二)。

## 八、神の心

神の心とは何であろうか。神の心とは自然の法則であり、最高道徳といつても抽象的すぎるといえる。最高道徳とは、自我没却、慈悲実現(神意同化)、義務先行、伝統尊重、人心の開発救済であるから、これらはかなり具體的である。

神の心、最高道徳の根本は慈悲とされる。慈悲とは、具体的には慈悲の一〇か条とされる。慈悲は、普通一般に考えられている愛とか思いやりの心とは根本的に異なると考えるべきである。もちろん愛とか思いやりと質的に根本的に異なるものではないのだから、相対的な違いであるともいえるのであるが、もう一方では、根本的に異なると考えることも必要である。この問題は、普通道徳と最高道徳の関係とも似ている。両者は、相対的な違いとして考えることもできるが、もう一方では質的な根本的相違とも捕らえることができる。つまり、現実的には私たちの心づかいは、幾分かは利己心が混入していることからすれば、純粋な最高道徳は聖人の精神作用

以外には存在しないといえるので、普通道徳と最高道徳の相違は相対的であり、個々人の精神作用の純度が異なるだけであるということもできる。しかし、もう一方では、普通道徳の世界と最高道徳の世界では、真理の次元が異なる面があり、考え方を根本的に転換しないと最高道徳の世界に入り込めない面があるのである。つまり、慈悲の一〇か条を考える場合にも、我々の慈悲の精神作用は『モラロジー概説』に示されている。慈悲の一〇か条とは、根本的な点で異なっていると考えるべきであり、根本的転換が必要となるといえる。

第一の、人間よりも物質を尊重する精神が我々の精神の基本となっている。事業中心、能率中心、物質中心主義の現代社会の特質はまさに、慈悲の世界とは正反対ともいえる。我々は徹底的にこの点は反省すべきだろう。第二の、普遍的に人間を愛する心にしても同様である。我々は自分の利害関係に応じて人を愛しているにすぎない。第三番目の親心についてはどうだろうか、自分ほどの位の人の親と考えているだろうか。こう考えると、親心になることは、我々の日常に考えている親心とは正反対の状態と考えることができる。第四の伝統に感謝報恩する心づかいにしても、決して十分なものといえないだろう。

こうして、苦勞の結果を分かち与える心、独占しない心、建設的な心、他人に快感満足を与える心、自己に反省する心の一〇か条の慈悲の心づかいがすべてが、我々の日常的な精神作用とは根本的に異なつた世界のものであることが分かる。したがって、我々の考え方の基準、判断の基準そのものを再吟味し、その根本から変革するという意図をもつことが一層重要なこととなるだろう。

換言すれば、最高道徳と普通道徳の根本的差異の一つは、慈悲心と利己心にあるが、我々が利己心を中心にしたまま、物事を判断したり、慈悲心とは何かを判断しても、慈悲の意味内容や最高道徳の世界は浮か上がってこないものである。最初から、慈悲を中心とした考え方を基盤にして、物事を考えなければ、最高道徳の世界は見えない。

てこないのである。

ここには、避け難い同語反覆（循環）のようなものが存在するといえる。利己心を克服し、慈悲心を培うためには、最高道徳を実行しなければならないのに、最高道徳を実行するためには、利己心を克服していなければならぬというようなものである。人間社会又は、人間の精神世界におけるすべての問題の底には、常に同種の自家懂着といえる同後反後が横たわっているようである。この問題はいかにすれば克服できるのであろうか。私は、論理的には解決不可能な問題に思えて仕方がない。この問題は今後も課題の一つとしていきたい。